
グラント

DEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラント

【Nコード】

N2863C

【作者名】

DEN

【あらすじ】

人ならざる存在〈グラン〉を倒すもの〈グラント〉。とある条件を満たしたもののだけになるその役職に、十七歳ながらも就かざるを得なかった少女、九茅朱奈^{くちあかな}。彼女の狂わされた運命の歯車が今廻り出す。

序章：狭間の存在（前書き）

ありがちなファンタジーで、やや暴力表現が含まれているかなと思います。

なお、作者の執筆速度が異常に遅いのと、意外と多忙なため、連載形式になっています。

つまりは、未完成な訳なんですけど、あらかじめ御了承下さい。

序章…狭間の存在

悲しい産声が辺りに響鳴する。

どうやら、また一つ望まれない子供が誕生したらしい。

九茅 朱奈（くち あかな）は溜息混じりに嘆く。

君たちは悪くない。悪いのは私たちなんだ、と。

しかし、本音がそこにあるとしても、彼女の行為は変わらない。

新たな生命を潰し、今あるものを守りゆくだけ。

朱奈は双眸を閉じ、天を仰ぐ。

夜空へ突上げられた綺麗な両手には、大剣が固く握られていた。

刹那——空気がざわめき、悲鳴をあげる。

朱奈は戸惑いながらもそれを子供に振り下ろしていた。

ギャチアア……

物体が碎けた嫌な音。

子供は空気と溶け合い、消滅した。

生を受けたのも束の間、実存は許されなかったということだった。

破片や液状の物質がついたままの剣を鞘に収めようとした彼女に歩み寄る二つの影があった。

その一つは子供の父親である。

事の一部始終を観覧していた彼は、

朱奈の細長い手を取り、

興奮覚め遣らぬ様子で告げた。

ありがとう。これで僕達は救われた、と。

その横でもう一つの影が朱奈に忍び寄る。

その人物は朱奈になど視線を振らず、ただ地面を見つめていた。

そして、朱奈を眼中におさめることなく、地べたにへたれこみ、

朔哉……さくや

と、か細い唇で形質を消去された息子の名を刻んだ。

母親である女性は、両の眼に涙を滲ませ、そう呟くことしかできなかったのだ。

朱奈は彼女にかけられる言葉を持ち合わせていない。

弁解も慰めもできず、切れ長の瞳で、子供を失った母親を見つめていた。

一方父親である男は、母親の震える肩にそっと包容力のある手をおく。

そして、甘く囁くのだ。

泣く必要なんてない。僕達は助かったんだ。解放されたんだよ、アノ化物から……。

朱奈は確信していた。

この夫婦には、ズレがあることを。

父親はアレを子供だと認識していない。

が、

母親はアレを子供だと知覚している。

これは、致命的な歪み。

二人の振れた感情線が一致することは、もはやないだろう。

朱奈は居た堪れなくなり、一刻も早くこの場から退散したくなっていた。

足早にその場を去ろうと無言で夫婦に背を向ける。

だが、そこまでだった。

朱奈には、どうしても肝心の一步が踏出せない。

罪の意識が、彼女に重い足枷をはめていた。

任務という正当な理由があるとはいえ、命を奪う行為はいつの時代も大罪なのかもしれない。

せめて、あの母親に一言だけでも謝っておくべきだろうか？

朱奈は心中葛藤してしまう。

そうした気遣いは時に判断力の遅さを招く。

そして、彼女の欠点となり、彼女自身に牙を剥くこととなった。

その場に佇む朱奈に向かって、母親は確かにこう洩らした。

……人殺し

か細い声が静寂の闇夜にひどく耳障りに響き、朱奈はそれを耳にしておしまった。

愕然とし、体が震える。

突き付けられた言葉から逃げるように、朱奈はその場から走り去った。

朱奈は十七歳。

人殺しのレッテルを貼られるには、まだまだ幼すぎたのだ。

――しかし、

呪われた世界で、少女は駆けなければならない。

狂乱に渦巻かれた運命から、自身を切り離すことなど出来ないのだから。

序章：狭間の存在2

そこは、ありふれた外国街だった。

街道沿いに多くのレンガ造りの商店が建ち並び、品のある街灯のせいで夜なのにやたら明るいのが印象的。

年の瀬でもないのに、人々の往来が激しいのはそこそこ発展しているからだろう。

溢れんばかりの活気が街全体を覆い、ここだけは呪われた世界から隔絶されているのだと錯覚しそうにさえなる。

さて。

朱奈はそんな輝く街中で、息も切れ切れに足を止めた。

店のウィンドウガラスに反映された彼女の顔はひどく無様に思われた。

乱れた前髪がぴたりと張付いた額からは汗が滴り落ち、眼からはそれとはまた別の水が流れ落ちる。

まるで、川に身投げした霊体のよう。

そんな自分を見て、朱奈はまた一つ落ち込んだ。

やっぱり私はこの眩しい街には、似合わないんだ……。

此所でも居場所をなくした彼女は、再び今度は、歩き出す。

重い足取りで。

一歩ずつ着実に。

街から離れていく。

その途端だった。

彼女の目前に悲痛な光景が見受けられたのは。

朱奈が目にしたのは、年老いた女性を集団で囲むという信じ難い程腐敗した若者の姿だった。

彼らが、老婆に対して金銭を要求していることなど、誰でも容易に想像がつく。

なのに。

徘徊する人々は頭から無視を決め込み、誰も救いの手を差し伸べようとはしない。

袖で涙を拭い、彼女はその方向へと疾走する。

途中、背中に負われた血腥い剣の柄に手をかけ、それを抜いた。

が、それは決して戦うためではない。

朱奈は好戦的な性格ではなく、むしろ非戦闘主義だ。

その彼女が、戦わずして、老婆を救うためにはこうして剣を抜き、証明するより他なかった。

そう。己が〈ヘグラント〉であることを。

例え自身が傷つく羽目になったとしても、だ。

朱奈は、集団の中心に体躯をねじ込ませ、老婆を庇うように立つ。

剣の切っ先は、リーダー格と思しき男の喉元をしっかり捉えていた。

突き付けられたその男は一瞬たじろいだものの、朱奈の華奢な外見を一瞥し、馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

「なんだ、驚かせやがって。おい、女引っ込んでろ」

朱奈は無言で立ち尽くす。

正直、怖かった。今にも崩れそうなくらい、全身が振るえていた。

それでも、出来る限りの活力を瞳に込め、朱奈は男の顔を見据えた。

「それとも、なにか……俺たちに集団で犯されたい願望でもあるのか？」

男の口元が嫌らしい角度で歪曲する。

他の男たちの顔も、見るに耐えないものだった。

ここで、朱奈は目を瞑る。

それは、醜いものから眼を反らすために。

それは、自分を落ち着かせるために。

そして、おそろおそろ剣の柄に捺された忌々しい刻印を突き付けた。

人体を象った、無数の虫が這いずりまわる徴。

異形とも思えるそのシンボルは、一度見ると目に焼付いて離れない。

喉元から絞り取るように男が声を出す。

「……グ、グラント」

朱奈が肯定の意で、かぶりを振る。

若者たちは一目散に逃亡した。

彼らだけではない。

周りの野次馬たちも即座に距離を取り、離れていった。

口々に叫ばれる悲鳴。

化物だ。呪われるわ。近付いちゃ駄目。殺されちゃうよ……!!

誹謗中傷を受け流すことができない彼女は剣をしまうと駆け出した。

覚悟はしていたはずなのに、それでもやはり耐えられなかった。

夜闇を目指して駆け出す彼女の背中に、老婆が声を投げ掛ける。

だが、今の朱奈にはその言葉を聞き取る余裕などなかったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2863c/>

グラント

2010年12月5日14時52分発行